すとろべりぃの気持ち

源田聖司

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
すとろべりぃの気持ち

【Ｎコード】
Ｎ０６１３Ｐ

【作者名】
源田聖司

【あらすじ】
俺にとってのストロベリーの飴は少し特別だ。それを見る度に昔のことを思い出す。甘くて酸っぱい昔話。

「僕」はその時、小学一年生だった。

入学式も終わり、やっと落ち着いて授業が始まり出した5月のある日。隣の家に住んでいる、幼馴染のれいかちゃんが引っ越してしまうことを知った。「はかた」という場所へ越してしまうらしい、お父さんが言っていた。どうやら、僕たちが住んでいる「せたがや」からはとても遠い場所のようだ。

幼稚園の頃かられいかちゃんと一緒に遊んでいたから、居なくなってしまうのは不思議な気がする。何だか僕の心臓の、もっと奥の方がギュッとするようで、その日は中々眠れなかった。

翌朝、お母さんがカーテンを開ける音を聞いて起きた。昨日は中々寝付けなかったのだが、いつの間にか眠ってしまったようだ。夏に近づきつつあるこの頃の朝はすがすがしい気分のはずだけれど、昨日のギュッとするような感じが今日はもやもやとしているようで、なんだかあまり良い気分にはならない。窓が南側にあるけれど、反射した朝日が目に入ってきて眩しかった。

着替えを済ませてダイニングへ朝食を取りに行こうとしたときに、ちょうど会社に出勤しようとしているお父さんが玄関に居た。僕に気付いたお父さんは、どうやら僕に用があるようで呼んでいる。スーツをピシッと着こなしているお父さんは、狭苦しい玄関にあっても何だか格好良かった。

「なあに、お父さん」

まだ眠気が覚めない僕は、ぼーっとしながらお父さんの所まで歩いて行った。そんな僕の様子にお父さんは喉の奥でくつくつと笑い、傍まで来た僕の頭を少し乱暴にかき回す。

「これ、やるよ」

そう言って僕に手渡したのは、二つの赤くて小さいビニール袋に包まれた飴だった。袋の色から考えるにリンゴ味なのだろうか。二つしかくれないのは少しけち臭いと思う。
「それはな、スロトベリー味だぞ」
「すとろべりぃ？」
聞いたことのない言葉に僕は首をかしげた。その様子に、お父さんはまたおかしそうに笑う。
「そう。イチゴって意味だ。イチゴの事を英語ではストロベリーって言うんだよ」
ふーん、と気のなさそうな声で反応してしまった僕に、怒ったような声で、それ、高級飴なんだからな、と言いながら、やはり僕の頭をかきまわすお父さん。いつものピンク色の袋のイチゴ味とはちょっぴり違ったストロベリー味をもらった僕は、何だか少し大人になったように感じられた。

その後、そのまま家を出てしまったお父さんに、結局二つしかくれないのかと文句も言いたかったが、僕も小学校に行かなくてはいけないので、仕方なくダイニングへ向かった。ダイニングではお母さんがすでに朝食を用意してくれていて、良いにおいが漂っている。さっと食事を済ませた僕は、さっき貰った飴をお母さんに取られないように自分のポケットにしまうと、ランドセルを背負い、黄色い安全帽をかぶって登校の準備をした。
「さっきお父さんに飴を貰っていたでしょう」
突然お母さんが聞いてきた。先程お父さんから貰っていたのを見ていたのだろうか。あげないよ、とお母さんに言いながら、僕は自分のポケットの中の飴を確認した。大丈夫、ちゃんと二つある。
「一つれいかちゃんにあげたらどう？　引っ越してしまったら中々会えないんだし」
僕は少しむっとした。二つしかないのに一つあげてしまったら僕の食べる分が一つになってしまうじゃないか。僕はそれに答えず、

行ってきます、とだけ言って家を出た。

僕が学校に着いた時、れいかちゃんはまだ居なかった。今はまだ春だから、朝の空気は澄んでいて爽やかだ。けれどやっぱり、なんだかもやもやしていて、湿っぽい感じがする気がした。何もすることが無く、どんな味がするんだろうと飴の事を考えながら、しかし、数が少なくて食べられないでいると、いつの間にかれいかちゃんが学校に来ていた。帰りに会えるだろうか、れいかちゃんに引っ越しのことを話したいから、それを聞きに行こうと思ったけれど、れいかちゃんの周りには人が集まっていて、今行くのは恥ずかしい。れいかちゃんは人気者だ。

行こうかどうか悩んでいる間に先生が教室に入ってきて、学活の時間になった。学活は上級生になると、ホームルームというらしい。どうして呼び方が違うんだろう？

結局、トイレに行くふりをして話すことに決めた。れいかちゃんの席は廊下側の一番前の席だから、場所もちょうどいい。僕の席は真ん中の一番後ろで、れいかちゃんとは少し距離がある。立ち上がって歩き始めた。

一歩、二歩。……あと5メートルくらいか。少し緊張して、手が湿ってきた。あと3メートル。

そこで急に体が誰かにぶつかった。れいかちゃんの方をばかり見ていたから全然気が付かず、思いっきり転んでしまった。机にもぶつかり大きな音が立つ。教室が一瞬静かになり、またざわざわとした雰囲気に戻った。僕の事を何か言っているんじゃないかと思うと恥ずかしくて顔が赤くなってしまう。立ち上がってズボンに着いたほこりを払うために少しかがんでいると、目の前が少し暗くなった。顔を上げると、そこにはれいかちゃんが居た。

「大丈夫？」

れいかちゃんは心配そうな顔をして僕に聞いてきた。けがはないが、大きな音がしたから心配になったのかもしれない。僕は、ん、

と言って廊下とは反対側にある窓の方を少し見た。格好悪くて恥ずかしかったから。
「あの、さ……」
「なあに？」
僕が少しどもりながら言うと、れいかちゃんは首をかしげて聞き返してきた。れいかちゃんは結構可愛いと思う。
「今日さ、学校が終わったら、裏の公園に来てくれる？」
周りに皆が居て、とても恥ずかしかったけれど、思い切って聞いてしまった。周りが静かになってしまったことに気づく。
「いいよ」
れいかちゃんは即答した。その瞬間に周りが僕たちの事をはやしたてた。あつあつー、とかラブラブーとか、そんな言葉があちこちから聞こえる。僕は恥ずかしくなってトイレまで走って行った。

授業がすべて終わった帰り。僕はさっさと公園に向かった。学校の裏はちょっとした雑木林が広がっていて、近隣の住民の憩いの場所となっている。しかし、もうすぐ夕方を迎える頃合いだからだろうか、人影が少ない気もする。
「おまたせ」
ぼうっとして考え込んでいると、れいかちゃんが僕の顔を覗き込みながらそう声をかけてきた。顔が近い。僕は突然現れたれいかちゃんに、何を言おうとしていたのか忘れてしまった。
「別に……」
もごもごとはっきりしない僕の言葉。ちゃんと話さないのは好きじゃないのに、こんな風になってしまう　。普段はこんなことないのにな。
「ごがつはれ」な今日はポカポカしていて暖かかったけれど、夕方が近づいている今は何となく寒い気がする。この前、図書館においてあった昆虫図鑑の表紙にいたモンシロチョウが飛んでいく。白くて綺麗なモンシロチョウは、傾いてきた陽射しに染まっていつも

と雰囲気が違うような気がした。そわそわするような感じで落ち着かない。
「どうしたの？」
そう言って、れいかちゃんは僕のことを覗き込んできた。日に照らされて、少し黄味がかったれいかちゃんは、大人っぽい。
「何でもないよ」
「何でもないのに呼んだの？」
あ……、僕はモンシロチョウを見てたかられいかちゃんがそう言ったのかと思ったけど、どうやら違ったらしい。ここに呼んだことを聞いたみたいだ。れいかちゃんは不思議そうな顔をしているから、変には思われてないはずだ、きっと。
「あの、そうじゃなくてさ、れいかちゃん、引っ越すって聞いて……」
またもごもごとした話し方だったけど、れいかちゃんには通じたみたいだ。れいかちゃんは頭が良い。
「そうだよ」
少し寂しそうな顔をしている気がする。何か嫌なのかな。遠くに行くのは、僕だったら楽しみだけど。
「やなの？」
不意にれいかちゃんの気持ちが知りたいって思ったんだ。思いきって聞いてみた。
「嫌じゃないよ。家族だって一緒だもん。けど、仲良しな人と離ればなれになっちゃうのはちょっと寂しいかも」
「そっか」
僕はその仲良しに入っているのかな。僕のことも寂しいって思ってくれているのかな。いろいろ考える。幼稚園の頃はたくさん遊んだけど、小学校に入ってからは遊んでないし……。もっと遊んでおけば良かったって、何だか遊んでいて宿題を忘れちゃったときみたいな、変な気分になった。
「はかたって所に行くんでしょ？」

「そうだよ」
「そこって遠いんだよね」
「うん。そうみたい」
「そっか」
何だかモヤモヤする。何か間違ってしまいそうなときみたいな、そんな感じ。

れいかちゃんとの会話が止まってしまった。二人して、ただただ前を見つめる。既に夕方の頃合いになってしまった公園が目の前にある。いつもいつも、夕方の公園を見るたびに寂しくなるんだ。楽しかった遊びを終わりにしなくてはいけないからだろうか。明日すぐに会えるというに。そう考えると、何だかれいかちゃんの引っ越しが急に寂しく思えてきた。やっとモヤモヤしていた気分が何だったのか、わかった気がする。
「これ、あげる」
そう言って僕がれいかちゃんに渡したのは、お父さんに朝もらった、あの飴だ。何かれいかちゃんに渡しておきたいと、そう思った。
「ありがとう」
れいかちゃんは受け取った飴をコロコロと転がしながら見ている。やっぱりれいかちゃんは可愛いと思う。
「それ、すとろべりぃ味なんだ」
「ふぅん、そっか。私、ストロベリー味は大好きだから嬉しいな」
れいかちゃんはまるで花が咲いたかのように笑うんだ。僕の顔は真っ赤になってしまっていたと思う。
けど、れいかちゃんはすとろべりぃを知っていたんだな。やっぱりれいかちゃんは頭が良いんだ。
れいかちゃんは飴をポケットにしまうと、ベンチから立ち上がった。
「もうそろそろ家に帰らなくちゃ。荷物を段ボールに詰めなきゃいけないから、早めに帰ってきなさいって言われてたの」

「もう？　そんなに早く引っ越しちゃうの？」
僕が引っ越しのことを聞いたのは昨日なのに、もう引っ越してしまうのだろうか。引っ越しってそんなに早く決まってしまうものだっただろうか。突然のことに頭がついていかない。れいかちゃんが引っ越してしまうまでの間、一緒に遊ぼうかと考えていたのに。
「明日。明日、引っ越すんだ。お父さんの転勤が結構急に決まったみたいなの。お家は社宅になるみたいだから、そういう準備はすごくスムーズに決まったって言ってたけど。
学校にはね、寂しくなると思って引っ越しのこと、内緒にしてもらってるの。実は今日が最後の学校だったんだよ」
「そんな……」
「だから、最後に話せてよかったと思ってる。ありがとう」
れいかちゃんが何を言っているのか、全然頭に入ってこない。だって引っ越しのことを聞いたのは昨日で、はかたって所に引っ越しちゃうから会えなくなっちゃって、けど明日にはもう引っ越しちゃって。
もう、会えなくなっちゃうの？

僕が呆然としていると、突然れいかちゃんが僕に抱きついてきた。
「な、に？」
髪の毛から甘い匂いがするんだ。僕のうちにあるシャンプーとは違う匂いだ、なんてぼんやりと考えていた。腕にかかる髪の毛がくすぐったい。
「大好きだよ」
れいかちゃんが小さな小さな声で、僕の耳元に呟いた。僕がそれを理解する前に、れいかちゃんは、じゃあね、と言って走り去ってしまった。

僕はいつまでも一人でベンチに座っている。もうそろそろ帰らな

いとお母さんに怒られてしまうかもしれない。けれど、家に帰る気にはならなかった。ボーッとして一人で座っている。何かをなくしてしまったような気がした。

ここには何もすることはないのに、ここを離れようと思えない。ここを離れると何かが終わってしまうような気がするんだ。

飴を舐めよう。

唐突にそう思った。ごそごそとポケットの中の飴を取り出す。赤い包装のビニールが、夕日に照らされてさらに赤い。まるで燃えているようだ。一日中ポケットの中にしまっていた飴は、僕の体温で少し溶けてしまっていた。袋を開けても中々出てこない飴に、僕は破くように袋を剥がそうとするが、指が震えてしまって、指が濡れてしまって、思うようにいかない。何故か視界が歪んできていた。

やっとの思いで取り出した飴を口に放り込む。

僕のすとろべりぃは、赤くて酸っぱくて、けれど甘くて、そしてしょっぱい。

自分を照らす夕日の中に溶けていくような、そんな気がした。

僕が俺になったとき、初恋と失恋を知ることになる。

（後書き）

この度は、源田聖司の作品をお読みくださいましてありがとうございました。
この作品は、僕にとって「なろう」での処女作です。たくさんの作品を読んでもらえるようになりたいと思っています。まだまだ至らない部分が多いですが、僕の作品に興味をもって頂けた方は、是非今後ともよろしくお願い致します。

誤字脱字、その他気付いた点等ありましたら、お知らせください。

本当にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0613p/

すとろべりぃの気持ち

2010年11月24日20時40分発行